

野球はアメリカ人のナショナル パスタイム(国民的娯楽)

山本玲子

「野球の神様」と称されるベーブ・

ルース以来の二刀流で、大リーグの球宴(オールスターゲーム)に先発投手、そして打者として出場するという、史上初の快挙を成し遂げた大谷翔平選手。大谷選手の活躍で改めて熱い視線を浴びている大リーグだが、アメリカでは野球のことを「National Pastime=国民的娯楽」という。アメリカの野球場を訪れると、野球が国民の楽しみであり、アメリカという国家に根差したスポーツであることが実感できる。

野球場は公園

アメリカで野球場のことをボールパークBall Parkという。家族揃って「野球」を楽しむに行く「公園」というわけだ。球場に入ると、一面に緑色の絨毯が広がる。手入れの行き届いた芝生はまるで芸術作品のよう。ファインプレーの多さはこの芝生ゆえ

に生まれるものだ。

フェンスの低さにも驚かされる。外野にいても選手との距離が近く、バットクネットも限られた場所にあるだけで、ファンとの距離を邪魔しない。シカゴのリグレーフィールドでは、選手と子どもがキャッチボールをする光景が見られる。

試合前はベンチに近い内野のフェンスで決まってサイン会も始まる。それだけではない。お気に入りの選手の名前を叫ぶと、運がよければ選手がフェンスまで来て、サインをしてくれる。知人(日本人女性)はイチロー選手のサイン入手に見事成功している。大リーグのファンを大切にする姿勢は、プロスポーツの本質を教えてください。

市民が誇りにする個性豊かな球場

球場にも個性がある。最も美しいといわれるボルチモアのカムデンヤード

は右翼にレンガの建物が壁のようにそびえている。建物は昔からある倉庫で、倉庫を生かしたまま球場が設計されているのだ。

ボストン・フェンウェイパークの名物は「グリーン・モンスター」と呼ばれる11・3mの巨大な壁。球場の形もいびつで、壁の向こうに道路があることからこの姿になったという。今年の球宴開催地であるデンバーの球場からはロッキーマウンテンを遠望できるが、中西部ピッツバーグのPNCパークは、右翼越しに見える町のスカイラインがまるで絵画のように美しい。特に夜はピルの灯りで幻想的に映る。また、カナダ唯一のチームであるトロント・ブルージェイズの本拠地はホテルとつながっており、外野席の上に客室がある。客室から観戦できるのが売りだが、かつてカッブルがいちやついたことがあり、観客は試合よりカッブルに釘付けとなったというハナシもある。



ボルチモアのカムデンヤード。右翼の倉庫ビルが球場のシンボル

ボールパークの楽しみ

エンターテインメントの国アメリカでは、球場に着いてからもファンを飽きさせない。インングの合間には短いショータイムが始まる。キャップでのボール隠し、本日の入場者数当てクイズ、その日のベストダンサー選びなど、トイレへ行くのがもったいないほど、あの手この手で観客を楽しませてくれる。

アトラクションもいい。ニューヨーク

クのヤンキースタジアムでは5回終了後、グラント整備が始まり、グラント

キーパーが揃って「YMCA」を踊り出す。観客も一緒になってYMCAの人文字を作る。また、ワシントンの球場では4回表が終了すると4人の大統領によるレースが始まる。ワシントン、ジェファソン、T・ルーズベルト、リンカーンの大きな着ぐるみが、今にも転びそうな勢いで一生懸命走る。ボケ役のT・ルーズベルトが走るとジャマが入ったり、いたずらされたりと、なかなか勝てないのだが、ファンはそれを楽しみに熱い声援を送る。

名物フード

球場ではその町の名物フードにもトライしてほしい。サンフランシスコのガリックフライ(ポテトフライのんにくオイルがけ)、フライデルフィアのチーズステーク(薄切りステーキとチーズ版ホットドッグ)、ボルチモアのクラブケーキ(カニ版ハンバーガー)、イチロー選手もお気に入りのポストンのフェンウェイ・ドッグ(ホットドッグ)など。現在アメリカで大流行の地ビールも実に豊富で、数えたら13の地ビールが売られている球場も

あった。

個性を尊重する大リーグ

今年の球宴では、二刀流の大谷選手が存分に活躍できるようにルールを変更した。この粋な計らいにファンは大喜び、大谷選手も心より楽しんでいうが見えた。ファン、選手双方にとってのメリットを躊躇なく実行するのが大リーグらしいフトコロの深さである。

ところで、大リーグは日本のように指導者が手取り足取り教えることは稀だ。指導者が理想とするスタイルに合わせようと無理強いをすることがない。ひどいスランプに陥ったときくらいしか指導はしないとわれ、気になることがあれば選手のほうからコーチにアドバイスを求める。コーチは見ているだけのように感じるが、選手の微妙な変化を察知し、スランプの原因について助言を与える。それは、選手の個性やスタイルを尊重したうえでの助言である。

日米の指導の違いは社会全体についても同じことがいえるのではないか。日本では指導者が自分より器の大きい部下を認めない傾向がある。これまで

の権威を笠に着て、有望な若者を自分の思う枠にはめる。やっかいなのは、指導する側にその自覚がないことだ。

ひとりひとりの才能が十分に発揮できる社会、これをつくらない限り、コロナ後も低成長を続ける日本が見えてくる。大谷選手に関していえば、本人が二刀流で行きたいのなら、そうさせてあげるのが第1ではないか。球宴で披露した大谷選手の伸び伸びとしたプレーと笑顔はその証左だろう。往々にして天才は枠からはみ出た存在で、それを認めなければ天才は生まれない。

先人への敬意と人権意識

球宴前日のホームランダービーで出場する全選手の背番号が44番だった。44番は大リーグ歴代第2位の通算ホームラン数(実質1位)を記録し、今年1月に亡くなったハンク・アーロン選手のものだ。黒人のアーロンは自身が活躍することによって人種差別的壁を乗り越えた人物として称賛されている。

また、大リーグには全球団共通の永久欠番もある。42番。この持ち主がドジャースのジャッキー・ロビンソン選手だ。大リーグ初の黒人選手で、想

像を絶する差別と闘い、数々の功績を残した。大リーグに初出場した4月15日をジャッキー・ロビンソン・デーとし、その日はロビンソンへの敬意を込めて全球団の全選手が背番号42のユニフォームを着る。

大リーグ機構は人権や人種差別についても非常に敏感である。今年の球宴の開催地は当初、南部ジョージア州アトランタの予定であった。4月、同州でマイノリティにとって不利な選挙法が成立すると、機構はこれを問題視し、開催地を変更した。わずか3カ月前の英断である。そして、7月クリブランド・インディアンスは球団名を「ガーディアンズ」に変更。先住民への差別との指摘を受けての措置である。

翻って日本はどうか。ヘイトスピーチがまかり通っている現実があり、刑事罰の対象となるのが神奈川県川崎市だけなのは嘆かわしいことだ。これをおかしいと思わない限り、日本人の人権意識が世界基準に達することはない。

多様性を謳ったオリンピックも開催された。米大リーグのファン重視や個性を伸ばす指導、そして多様性や人権の意味を改めて考えてみたい。